河野龍也『佐藤春夫と大正日本の感性「物語」を超えて』 (鼎書房、2019年3月)

Tsukasa IZUMI (和泉司 : Associate Professor, Toyohashi University of Technology)

✉ sktmzi0918@gmail.com

(日本)豊橋技術科学大学総合教育院准教授。近現代日本語文学、文学賞研究。主著に『日本統治期台湾と帝国の文壇(文学懸賞)がつくる(日本語文学)』(東京:ひつじ書房, 2012)、『邱永漢「濁水溪」から「香港」へー直木賞が開いたものと閉ざしたもの』(『日本近代文学』第90集, 2014)、『殖民地の喫茶店で何を(語れる)かー日本統治期台湾の都市と若者』(『アジア遊学226建築の近代文学誌』勉誠出版, 2018)など。

Beyond Monogatari

: *Haruo Sato and the Sensibility of Taisho Japan*
by Tatsuya Kono (Kanae-shobo, March 2019)

At the start of the first chapter of the book, author Tatsuya Kono states that Haruo Sato is an author that respected others “who cannot be Japanese” and tried to become such a person. This book portrays Sato’s journeys to Taiwan and China and considers how he depicted Taiwanese and Chinese people, “who cannot be Japanese”. Through his earlier work *Sato Haruo Tokuhon*, Kono had a basic familiarity with Sato’s works, but in this book, he provides a deeper and more detailed analysis, which brings creative insight into Haruo Sato study

Keywords Haruo Sato(佐藤春夫), The Japanese(日本人), Taiwan(台湾), Shamen(廈門)

この本の扉を開くと、日本の戦前期の雑誌や単行本でよく見るレトロな書体によるタイトルに迎え入れられ、さらに読者を待つのは文章ではなく、佐藤春夫の自画像と肖像画、そして画家としての佐藤春夫の絵画や自筆原稿、台湾・台南市に現存する「女誠扇奇譚」（1925年）のモデルとなった「銃楼の家」の写真や台南市の地図である。詩人として登場し、小説家として名をなす一方、画家としても評価されるに足る画を残した。芸術の才に恵まれた人物としての佐藤春夫を、まずは図像によって紹介してくれている。

著者・河野龍也氏は、冒頭の第一章で、佐藤春夫が〈日本人ならざる者〉への憧れを抱き、自らを〈日本人ならざる者〉と見立てて活動を開始した作家であるという。ここで読者は、本書に用意されている、佐藤春

夫の台湾・中国への旅路とそれらを描いたテキスト群についての論考への導かれていること感じとるだろう。

〈日本人ならざる者〉であろうとする〈日本人〉の佐藤春夫が、いかに〈日本にあらざる〉時空に赴き、〈日本人ならざる〉人々を描いたのか。

河野氏は、佐藤春夫の小説デビュー作である「田園の憂鬱」を論じた上で、台湾を舞台とした小説「女誠扇奇譚」や「旅びと」、台湾対岸の福建に渡っての紀行文「南方紀行」といった、〈日本〉の外に出た佐藤春夫のテキストを、詳細な分析によって内部を論じ、資料搜索と実地調査を踏まえて外部も可視化していく。先行する『佐藤春夫読本』（河野龍也氏による編著。2015年勉誠出版）によって、佐藤春夫についての基礎的な情報・分析を整えている河野氏は、本書によって、より具体的に、深化しかつ視野をアジアに広げた佐藤春夫論を展開していると言える。

台湾の日本語文学を主な研究対象としている評者にとって、「田園の憂鬱」論をはじめ、佐藤春夫の詩論や、画家・佐藤春夫を視野に含めた分析はやや難解であったが、当然ながら、そこで見られる佐藤春夫の観点や姿勢を知ることが、台湾や福建を旅し、描いたことを理解していくために欠かせないものであることが、読み進めることによってわかってくる。評者のような読み方では、佐藤春夫の「台湾もの」テキストのみを特別視し、そこだけで理解を得ようとしてしまいがちになるが、それでは十分な理解にとどかないことを、この重厚な研究書が改めて教えてくれたのであった。

そして、本書の「第四部異郷への旅「日本人」であることの不安」こそ、先に述べたテキスト内部の分析と資料搜索・実地調査が交差した分析が達成された、評者にとって最も興奮し、また妬みを覚えてしまう箇所となった。「女誠扇奇譚」の「銃楼」の家を探り当て、合わせて清朝から日本統治期までの当地の歴史や、在台南日本人による「女誠扇奇譚」研究を背景に、テキストに描かれた時空が、どのような時代経験を重ね現在に至っているのかを論じる。

また同じように、廈門における佐藤春夫の紀行が、ミステリーの雰囲気を持ちながら描かれているものであり、かつ、事実として、佐藤春夫が旅した時(1920年7月)の中国は軍閥が割拠している時期であり、戦争が間近にある不安定で危険な状況にあったことを、歴史資料と実地調査を踏まえて本書では確認されていく。さらにこのとき、佐藤春夫は、無名時代の蒋介石とこの地で同じ船に乗船し旅していたことまで調べ上げている。このように、本書によって、激動する時代と歴史の中に、佐藤春夫とそのテキストが的確に位置付けられていくのである。

河野氏は本書末尾に、本文とはフォントと表記を異にする長めの「あとがき」を用意している。その中で、彼(敢えてここからはそう書かせてもらおう)は、自身が英文学を学び、大学院から国文学の道に進んで、その最中に「台湾」と出会った経緯を書いている。

このほぼ時期に、私(評者についてもここからこう書かせていただきたい)は彼と出会った。私と彼は、同じ日本の埼玉県出身で、高校の同窓生であった。学年は私が1年上。しかし出会ったのは高校時代ではなく、お互いに大学院生だったときで、しかし場所はやはり出身高校であった。私と彼は、出身高校で教員免許取得のための教育実習生として出会ったのである。2週間の実習を共にする中で、お互いに日本近代文学を学ぶ大学院生であると知り、終了後も連絡を取り合い、共に旅行に出かけたりするようになった。

そして、彼が「あとがき」で「台湾」と巡り会ったと述べている2000年に、私も彼とは全く無関係に「台湾」の日本語文学に出会い、学び始めていた。

彼が台湾に友人を訪ねていた同年夏、私は台湾の日本語文学を学ぶ上で必要だと考え、台湾・台南市で3ヶ月間の中国語語学研修を受けていた。このとき、彼は台南市の私の下宿先にもやってきて、二人で中古自転車をごしながら、昼と夜と、台南の街を回った。当時の私はまだ台南の地理に疎く、ろくに案内も出来なかったが、このとき、一緒に台湾にかかわる文学研究をしていこう、と話し合ったことを覚えている。

本書を読むと、このようなことばかりが思い出されてしまう。故に私は本書を、私自身がなし得なかった研究の達成点として読むしかなかった。だからこそ興奮し、また妬ましくも思うのである。

このような個人的な話で書評を終えることを、卑怯といいつつ、やはりお詫びするしか私にはできない。

そして同時に、私の尊敬する友人にして畏るべき後輩である河野龍也氏が、本書を出発点として、佐藤春夫を通して理解しうる日本語文学の時空を我々の前に示し続けていってくれることを当然の未来と信じて待ちつつ、日本語文学研究とアジア、世界をつなげていくための研究活動のために生きていくことを改めて胸に刻もうと思う。